

9月のGlobal Sessionレポート

期日:2024年9月15日(日)10:30~12:50

場所:ガレリア3階 会議室

ゲスト:秋山昌廣さん(ブラジル生まれ:大本本部 亀岡宣教センター)

コーディネーター:亀田博さん

テーマ:亀岡のブラジルの姉妹都市ジャンヂーラについて

ブラジル移民の歴史・出身地(パラグアイとブラジルの国境)について

参加者:13名

内容:

1. 南米のブラジルへの移民はどこから?いつから?
ポルトガル・アフリカ・ヨーロッパ そして日本から
ブラジルへの日本からの移民の歴史は100年以上
2. 日本からの南米への移民はいつから?
どの航路で?
3. 夢を実現する人々「さあ行こう 一家をあげて南米へ」
4. ブラジルとパラグアイとの国境
パラグアイ移民 1956年~2016年
5. 亀岡のブラジルの姉妹都市ジャンヂーラ
姉妹都市に 1984年11月

亀田さん(コーディネーター):では、自己紹介からお願いします。

R・Tさん:外国につながる子どもや保護者の学習支援活動をしているひまわり教室の指導者をしています。第1回の芥川賞受賞者の石川達三さんの作品がブラジルの話であったことも覚えています。それで、今日はブラジルの話を聞きたいと参加しました。

「『蒼氓』(そうぼう)は、昭和文学史上の記念碑的作品と位置づけられている。この作品は第一回芥川賞に輝き、作者は華々しく文壇にデビューした。作品の大きな特色は、ブラジル移民を集団的手法で用いて描いた点とされている。これは従来の日本文学には前例の少ない手法であり、社会派作家としての出発点でもあった。」

R・Aさん:文化庁の地域日本語コーディネーターを10年間ぐらいしていて、今は、個人で外国につながる人々の支援をしています。この仕事は、幅が広がって子どもたちも増えて来て、減ることはありません。アルファベットを使用しない国々からの来日も増えています。

M・S さん:海外に興味を持ったのは、英語からかと思っていましたが、最近それだけではなく、10才のころ、父が綾部のグンゼに勤務して居て、ブラジルに出張することがありました。その時に、パイナップルを引っこ抜く写真を持ち帰り、パイナップルは樹になるのではなかったかとか、ちょうちょをいっぱい貼った飾りとか、毛皮を生活の中でよく使うとか、驚くことがいっぱいありました。その頃から、日本とちがう生活習慣を持つ国があるようだと思ったのが外国に興味を持った契機かもしれないと思うようになりました。

S・F さん:日本語教室で教えるようになっていきます。知り合うと、ブラジルはバナナを青いうちから切って運び、黄色くなるまで待つし、フィリピンでは、黄色いのを撮るとかいろいろなちがいがあつたことを知りました。

T・T さん:国際交流協会の事業部会のメンバーでしたが、最近は体調が悪く、あまり参加していません。以前、仕事をしていて、アメリカに在住し、その時にいろいろお世話になったので、今からは恩返しをしたいと国際交流を始めたのですが、最近、弓道をしていて、ルーマニアの方の頼みを聞いてあげるようにしています。個人では何もできないので、児嶋さんに聞いて聞くところを探してもらったりしています。

Y・H さん:昔大槻市長さんのころ、世界青少年交流協会のメンバーとして、20才の時にドイツへ行つたことがあります。その時から、海外と接点のある仕事かしたいと思ひ、総合商社に入りました。退職後、2年前に亀岡に戻りました。その間、ブラジルは2回出張したことがあります。退職後は、接する機会があまりなかつたのですが、このような Global Session に参加し、視野を広げたいと思つています。

F・K さん:35年間滋賀県で特別支援教師をしていました。10年以上前に退職しました。昨年、京都市内に住み始めました。外国につながる障害を持った子どもさんが、来日して、通訳がないと、説明することもできないので、成績もわたせないこともあると聞いています。学び直しの時期と参加しています。

E・T さん:京北町出身です。会社を変わり、9年ぶりに亀岡に転入しました。食品工場などで、ブラジル出身の人たちと会つたことがあります。明るくてのりがいいなあと感じました。国が経済的に苦しいので、生活のために働く人々を見て、自分も負けていられないなあと思ひました。

A・O さん:そこに居る児嶋きよみさんの娘です。父の仕事でブラジルのベロ・オリゾンテに3年間住んでいました。ちょうど10才から13才までなので、記憶はしっかり残つてい

ます。日本人学校で学んでいましたが、ブラジル在住の日系人との交流もありました。1世のおじいさんやおばあさんは、日本への強い思い入れがあると感じました。日本人と接する時にはとてもいねいで、独特な感じがしました。

N・F さん:市役所で仕事をしています。フランスへ留学したこともあります。ブラジルの音楽が好きです。

児嶋:1999年に亀岡交流活動センターで始めた Global Session は、今回で 379 回目になります。毎月 1 回の開催で、2011年に退職後は、こちらでやってほしいと要請があり、オフィス・コン・ジュントの主催・亀岡国際交流協会との共催で続いています。

亀田さん:コーディネーターをしていますが、大津市から来ています。毎月 Global Session に参加していて、今回は、ブラジル出身で今は、日本に住んでおられる秋山さんに、ブラジルでの生活や情報をお聞きしたいと思います。ブラジル移民が始ってもう、106年くらいになるそうですが、現在のブラジルと以前とを比べて政治や治安なども含めてお聞きしたいと思います。1世や2世の方は、年々少なくなっていくかもしれませんね。今は何世ですか？

秋山さん:4世も5世もいます。

亀田さん:では、秋山さん、よろしくお願いします。

秋山さん:日本の亀岡に来て9年目になります。大本の国際部にいます。2016年には、首都のブラジリアに行き、2018年には、サンパウロ州のジャンヂーラ市の大本本部に行き、4年居ました。2022年に日本に帰国して今年は、2年目になります。



私は、ブラジルとパラグアイの国境の町で生まれ、午前中、ブラジルの学校に行き、午後はパラグアイの日本語学校に行き、日本語も学びました。南米の移民としては、最初奴隷として、アフリカから連れられて来た人や、イタリアやドイツなどのヨーロッパから来た人が多いです。ポルトガル人がなぜ、ブラジルに来たのかというと、ポルトガルからスパイスを買おうとアフリカに向かった船がブラジルに着いたことが初めてとされています。

「1500年に南米に到達したポルトガル人は、現地の人々が鮮やかな赤い色の服で着飾っているのを見て、スオウと同じ色素を持つブラジルボクをパウ・ブラジルと呼んだ^[3]。ルネッサンス時代のヨーロッパでは、赤色の染料は大変貴重で、特に赤い染料で染め上げられたベルベットは王と枢機卿だけのものだった^[3]。ポルトガル政府は赤い染料を得るために輸出の独占権を与え、ブラジレイロ(burasileiro)と呼ばれる人々によって海岸近くのブラジルボクが切り倒されて市場に運ばれ、高収益産業が始まった^[3]。これまで極東からヨーロッパへの輸入に頼っていたスオウに比べると、南米からの輸送ははるかに容易で、それまで Terra de Vwra Cruz(テハ・デ・ヴェラ・クルス＝「真の十字架の土地」の意)と呼ばれていたブラジルは、Terra do Brasil(テハ・ド・ブラジル＝「ブラジルの土地」の意)になった^[3]。」
(インターネット:パウ・ブラジルより)

秋山さん:1822年9月7日は独立記念日です。ブラジルがポルトガルから独立した日です。
1888年5月13日にプリンセス・イザベル(ポルトガル王子の嫁で、10才の時にブラジルに行った)が奴隷解放宣言をし、「黒人は奴隷ではない」とし、これ以後、移民政

策が始りました。それまで、黒人はアフリカから連れられて来て、ブラジルでもさとうきび畑で仕事をしていました。奴隷としては使えないので、移民を募集しはじめたと言われています。ポルトガル人の他には、イタリア人、ドイツ人、日本人が多いです。アルゼンチンは、スペイン人が多いですが。ブラジルも、最初は、移民は白人だけと限定していたようです。

第2次大戦後、秋山家は、おじいさんと父(広島生まれ)が来て、コーヒー農場やさとうきび畑で働き、仕事は、草刈りなどから始めたと聞いています。

私の母は、南西諸島の中のパラオ生まれです。静岡県出身の祖父がパラオへ移住し、鯉節を日本に送る仕事をしていました。母は、15才の時に日本に帰国し、その時母の祖父が、亀岡に来ました。その後、家族でパラグアイに移住したのです。この祖父が日本に帰国したときは第2次大戦が始る前で、状況を見て、「戦争はいやだ」とパラグアイへ移住したそうです。当時母は、17才くらいで、6人家族で移住し、コーヒー園で働いていたようです。私、秋山の父親は、当時パラグアイで通訳をしていて、母と出会ったようです。当時はもう戦後であり、ブラジルでは、「勝ち組み」と「負け組」の論争が激しく、大きな町から、パラグアイとの国境の町へと逃げたようです。そこでは、野菜作りなどを商売にしたり、製材所も多かったそうです。そこは、どの宗教でも良かったのですが、父はバイク事故で、50才台で亡くなりました。母は今も元気で、87才になりますが、その国境の町で、姉の一家と暮らしています。大本教とのつながりは、祖父がパラオで信徒としていて、その祖父が亀岡に来たときから始まったようです。お祈りをするとパラオでもいろいろな良いことが重なり、つながりを深めてきたようです。



日本からは、当時ビザ無しでパラグアイに行けて、当地の日本人会が強いので、ブラ

ジルの学校に行きながら、午後はパラグアイにある日本語学校に行くなどを子どもの時からしていました。第2次大戦中は、ブラジルでは、日本人やドイツ人、イタリア人も、収容所に入れられ、領地は取られましたが、大戦後は返却されました。ブラジルでは、その後、この大戦は「勝ち」とする勝ち組と負け組の殺し合いまでありました。大本本部も当時、土地を取り上げられましたが、あとで、ジャンヂーラに信者さんの持っていた土地を、南米本部の土地としてもらい、現在に到っています。

パラグアイへは、ブラジルのサントス港に着くと、車でパラグアイまで行って居ました。

そこでは、自分の国の墓もつくっていたようです。

今では、7割が日本にきています。私の従兄は日本語学校の校長をしていますが、いろいろな国の子どもも通学が可能なシステムでやっているようです。



パラグアイとブラジルの国境の道 パラグアイの日本語学校

ブラジルへの移民:ブラジルへの移民については、移民の父と言われる水野龍という人がいます。

水野龍「海外移民事業ト私」（憲政資料室所蔵 マイクロフィルム:移(一)-D3、紙:移(一)-ブラジル-110)より

「愈々出発の日、明治四十一年四月二十八日は到来した。当日は神戸、東京間の電信が不通となる程の春の日の大雪であつた。移民達は、宿舎を出て、雪の中を荷物の重さにも負けずに波止場へと急ぐ。女も子供も男達は負けずと旅屋の使用人などに援けられながら列に加はつた。「ブラジル」へ、、、「ブラジル」へ、、、起運の野望、雄渾な南の志、失意のどん底から立ち上らうとする勇猛心、自棄破境の心魂、疲れ果てた肉体と精神—移民達は思ひ思ひの夢を抱き或は悲しみを包んで笠戸丸の船室へと吸ひ込まれて行く。だが然し今は過去の総てを清算して新

たなる人生への再出発点に立つ彼等である。一度船上の人となれば、誰も彼も家族と共に異境万里の彼方に開拓の歩を進めんとする決意に満ちた拓人である。そこには、敗残者もなければ失望の人もない。前述には総ての者に公平な運命の神が、双腕を拡げて彼等の到来を待つてゐるのだ。逞しい意慾が今離れゆかんとする祖国の風物に見入る移民達の表情に明朗に浮び上るのを眺めて、何か力強いものが心底から湧き上ってくるのを感じた。彼等は「ハワイ」やその他の国国へ一攫千金を夢見て渡航する出稼移民とは根底に於て異なるものがあるのだ。一家を挙げて外国へ移住することは、当時の我が社会情勢を考慮すれば、相当重大な決心なくしては決行し得ざる処であつた。勿論その後日本の移民政策が漸次進歩し、移住者個々の自覚も亦海外発展の真義に徹する様になつた近時の状態とを比較すれば、そこに著しい移住精神の差は認められる。渡航の方法が安易確実となり、移住地の文化、就働施設等が保証される様になつて、千万里と雖も隣家を訪れるが如き今日の心易さと、初めて地球を半周して国情や言語の全く不通の「ブラジル」へ住み慣れた内地の生活を捨てて押し渡る心境は、蓋しその後の渡航者の窺知を許さぬ特殊なものがあることを認めなければならぬ。

移民達の仲には幾年か働けば相当の金を残して家族ともども内地に帰還し得るであらうと言ふ夢を抱いてゐたものも決して少くはなかつたであらう。然しながら、それは出発前或は船中に於ける仮定の着想であつて、「ブラジル」に上陸したその日から、現実には彼等移民達に委嘱民の何たるかを厳酷に教へるであらう。これがため私は募集に際しても又乗船後も機会ある毎に大和民族の海外発展の意義日本帝国国威の四海に及ぶべき時代への先駆者としての使命を説いて、新天地の開拓は出稼根性では完遂出来ない所以を力説し、永住の精神が時だに至らば彼等の胸底に湧き出さずべく様配慮したのであつた。その後第一回移民の後身指導が在伯同社会の建設に如何に大なる影響を与へたから検討する時私は彼等がその後の時代に「ブラジル」へ流入した失業移民や我利我利亡者移民に比較して、常に理想に燃え熱烈なる開拓精神を把握し得てゐることを実証し得たものとして満足に思はざるを得ない。」



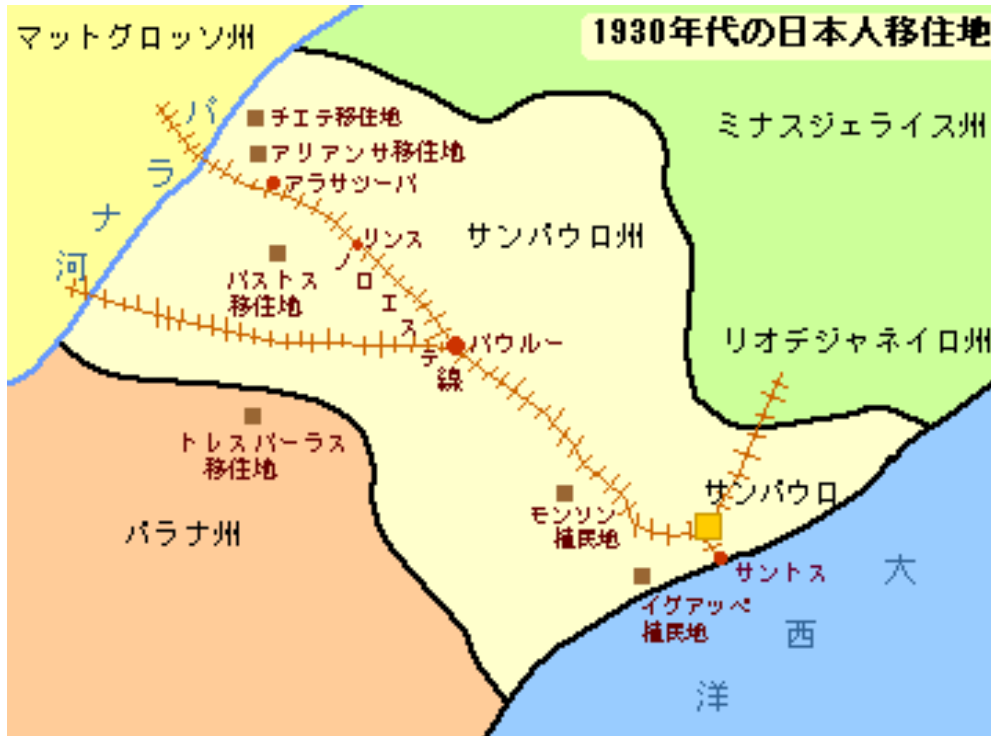


夢を実現する人々

- Pai da imigração japonesa no Brasil
- https://youtu.be/HoKw9Cf_tQ 10分
- <https://youtu.be/vy4aRafsxPQ?t=27> 27分



ブラジルへ(神戸港から)



亀岡の姉妹都市ジャンヂーラはどこかな？
 サンパウロ州ジャンヂーラ市



ブラジル連邦共和国サンパウロ州にあり、面積は約
 17 km²。海拔は 726m と高く、丘陵と坂の多いまち です。気候は四季の変化に富み
 日本の季節とはちょうど逆になります。州都サンパウロ市の北西約 32km に位置し、人口
 は約 10 万 4,000 人で日系市民も多く住んでいます

2024年日系の市長さん一行が来日し、1984年11月の姉妹都市盟約から40年
 目に当たります。2025年には10名の中学生グループが代表として来日予定。

ジャンヂーラが姉妹都市になったのは、南米大本本部がジャンヂーラにあることからで
 す。

2023年7月



令和6年7月



2024年

亀岡高校で柔道、亀岡市民と交流



大本青年部夏季学級で、ジャンヂーラの大本南米本部へ(2024年2月)



(2009年ジャンヂーラの大本本部で)

姉妹都市まで

昭和 56 年(1981)7 月 14 日 谷口市長からテイシェイラ市長に宛てた親書を 第 66 回世界エスパーント大会に参加される大本本部青年文化使節団長に託す。昭和 56 年(1981)9 月 24 日 大本本部を通じ、テイシェイラ市長からの親書を受信。昭和 57 年(1982)6 月 大本本部を通じ、谷口市長とテイシェイラ市長が親書をお互に交換す。昭和 58 年(1983)4 月 新市長としてロベルト・ピテリ市長就任。昭和 58 年(1983)6 月 大本本部を通じ、谷口市長とピテリ市長が親書をお互に交換す。

昭和 59 年(1984)9 月 26 日 ジャンヂーラ市並びにジャンヂーラ市議会から姉妹都市提携を承認される。昭和 60 年(1985)7 月 22 日～28 日 姉妹都市提携事前調査団(助役他 3 名)派遣。昭和 60 年(1985)11 月 3 日 姉妹都市盟約締結。ジャンヂーラ市副市長、議長が来市。昭和 62 年(1987)11 月 7 日～14 日 亀岡市姉妹都市親善訪問団(谷口市長他 13 名)派遣。

平成 2 年(1990)4 月 29 日～5 月 4 日 亀岡市代表親善訪問団(助役他 2 名)派遣

平成 2 年(1990)11 月 1 日～6 日 市制 35 周年記念式典にパスコアリン市長他 3 名来市。

平成 5 年(1993)4 月 24 日～5 月 2 日 ブラジル姉妹都市等親善訪問団(谷口市長他 2 名)派遣。国際姉妹都市協会(SCI)3 カ国交流プログラムに係る協議。

平成 7 年(1995)4 月 27 日～5 月 6 日 日本ブラジル修好 100 周年記念、亀岡市姉妹都市盟約締結 10 周年記念訪伯団(谷口市長他 2 名)派遣。

平成 7 年(1995)11 月 1 日～8 日 市制 40 周年記念、国際友好・姉妹都市交流記念式典出席のためロベルト・ピテリ市長他 7 名来市。

平成 10 年(1998)10 月 31 日～11 月 7 日 ガレリアかめおか竣工式典、国際姉妹都市会議時 ジャンヂーラ市代表としてマリア・エレナ・パスコ アリン市長夫人他 1 名が来市。

平成 15 年(2003)10 月 15 日～19 日 亀岡市・ジャンヂーラ市平和友好公式親善訪問団 (教育長他 19 名)派遣。

平成 17 年(2005)10 月 30 日～11 月 7 日 亀岡市制50周年記念姉妹・友好交流都市招聘事業 パウロ・エンリケ・バルジュ市長他 4 名来市。

平成 20 年(2008)9 月 3 日～11 日 亀岡市・ジャンヂーラ市平和友好親善訪問団(市長他 14 名)派遣。

2018年 桂川市長のジャンヂーラ訪問 交流会

2022年 ブラジルの姉妹都市ジャンヂーラ市と亀岡市長によるオンライン対談が行われました。(

両市長のコメント:両市のHPをシェアします。遠い国、ブラジルがオンラインでとても身近に感じることができます。

9月の Global Session レポート(質問シリーズ):2024

亀田さん:質問をどうぞ。

M・S さん:前のブラジルの大統領はボルボナール三でしたね。今はルーラー大統領ですが、以前の方が過激でしたか？今は良くなっているのでしょうか？アマゾン開発でいろいろな問題があるようですね。ゴムとか水銀とか。

T・T さん:アメリカにはインディアン居住地がありますが、ブラジルにはありますか？

亀田さん:シャーマンも多いですね。

S・F さん:先ほどパラグアイとブラジルを道一本で渡って学校へという話しでしたが、行き来はフリーですか？パスポートはいらないのですか？二つの国で活動されているのですね。

秋山さん:少し行くとあるイグアスの滝は、行き来は別になりますが、私のいたところはフリーでした。宗教もいろいろありますが。

T・T さん:以前、ホームステイとしてポルトガルの人を自宅に泊めたことがあります。最初のころは、スペインも金や銀を取るためにアマゾンに入って行き、ペルー人がコロ

された歴史もありますね。

Y・Hさん: ブラジルへの移民については、昔 NHK の番組で見たことがありますが、最初のブラジルへの移民の歴史を聞いて、実感としてよくわかりました。

また、第2次世界大戦でブラジルが連合国側についたことは知りませんでした。テレビで見ましたが、ブラジル議会は、日系人を収容所に入れたことは間違いであったと認めたのですね。

R・Aさん: アメリカの移民についてはよく知られていますが、ブラジルへの移民は日系人が多いのですね。

秋山さん: 第2次大戦時は、ブラジルにあった日本大使館も閉じて国際ラジオを持つ人は、その情勢を知ることができましたが、持たない人は、理解できずに、「勝ち組」と「負け組」の戦いがありました。勝ち組は、「日本の軍人が負けるはずがないと」

児嶋: 日本人学校と日本語学校はちがうですね。日本人学校でのポルトガル語の学習はどうでしたか？(岡本敦子に)

A・Oさん: 日本人学校では、日本と同じ内容での学習があり、外国語指導はゆるい感じでした。今とちがって小学校で英語の指導もなかったし。

R・Tさん: 亀岡市は姉妹都市と友好都市が4つもあり、ジャンジーラを取り上げ、移民の歴史などを学びながら、10才の子どもたちへ「ブラジルはどんな国？」とか、考えさせて、中学生の代表を送り、その発表会をするのも良い機会だと思います。

秋山さん: サンパウロに日伯新聞がありますが、日系人がたくさん読んでいます。日系人の政治家も多くなり、議員が50%を越える地域もあります。

亀田さん: そろそろ一時に近くなりましたので、今日はこれくらいにしましょう。また、秋山さんの話を聞く機会を作り、直接お聞きになるのもいいと思います。

10月の Global Session のお知らせ(2024)

期日: 2024年10月26日(土)10:30~12:00

場所: ガレリア3階 会議室

ゲスト: 玉野井麻利子さん(アメリカ大学名誉教授・京都市在住)

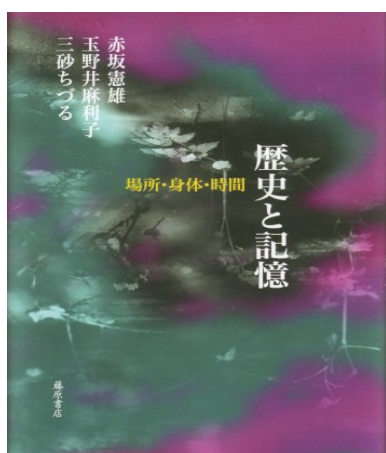
タイトル: 縮小社会の歴史を辿る

コーディネーター: 亀田博さん

参加費: 600円(中学生以下の子どもは無料)

申し込み: 児嶋へ メール: kiyomi-kojima@gaia.eonet.ne.jp

概要: 「縮小社会」という言葉が生まれたのは1990年代。それから20年以上経った今も解決の糸口がありません。政府は、女性にはもっと多くの子供を産んでいただきたい、そのためにはお金を差上げますから、といった単純な言説を繰り返すばかりです。今回は「縮小社会」を全く違った側面からアプローチしようと思います。その方法とは「縮小社会」を明治から歴史的に追ってみること。実はあまり自信がないのですが、頑張ってみます。よろしくお願いします。



玉野井麻利子さんのお薦めの本

現在は、京都に拠点をおきながら、人類学者としてのさまざまな視点で「人類学者の見る日本2(逆カルチャーショックとは?)」などのメール通信もされています。

ぜひ、目の前でいっしょに考えてみてください。おもしろいですよ。

児嶋きよみは立命館大学大学院時代に、講師であった玉野井麻利子さんに会い、そのまま Global Session のゲストとして何度も来ていただいています。